

シラスウナギの溯河時期及び溯河量調査

担当 新 崎 盛 謙

趣 旨

養鰻種苗としてのツラスウナギの需用が、年々増加し、本土では台湾等の外国から輸入している現状である。沖縄では養鰻の企業化が有望視されながら餌料、種苗等の問題でいまだに企業化されていない。しかし、この4.5年人工配合餌料の関与普及により餌料問題は解決されたが、種苗自給の点は従来の調査資料では結論を下すにはまだ不十分で、速急に解決すべき問題のひとつとなっている。このようなことから、おもに沖縄本島におけるツラスウナギの溯河時期、溯河量等を明らかにすべく本調査を実施した。

1 調査期間

1967年7月から1968年6月まで

2 調査河川

Figure 1および2に示した。

沖縄本島	金武原川	福地川	漢那川
久米島	白瀬川		
石垣島	通路川	森川	

Figure 1 Location of experimented stations

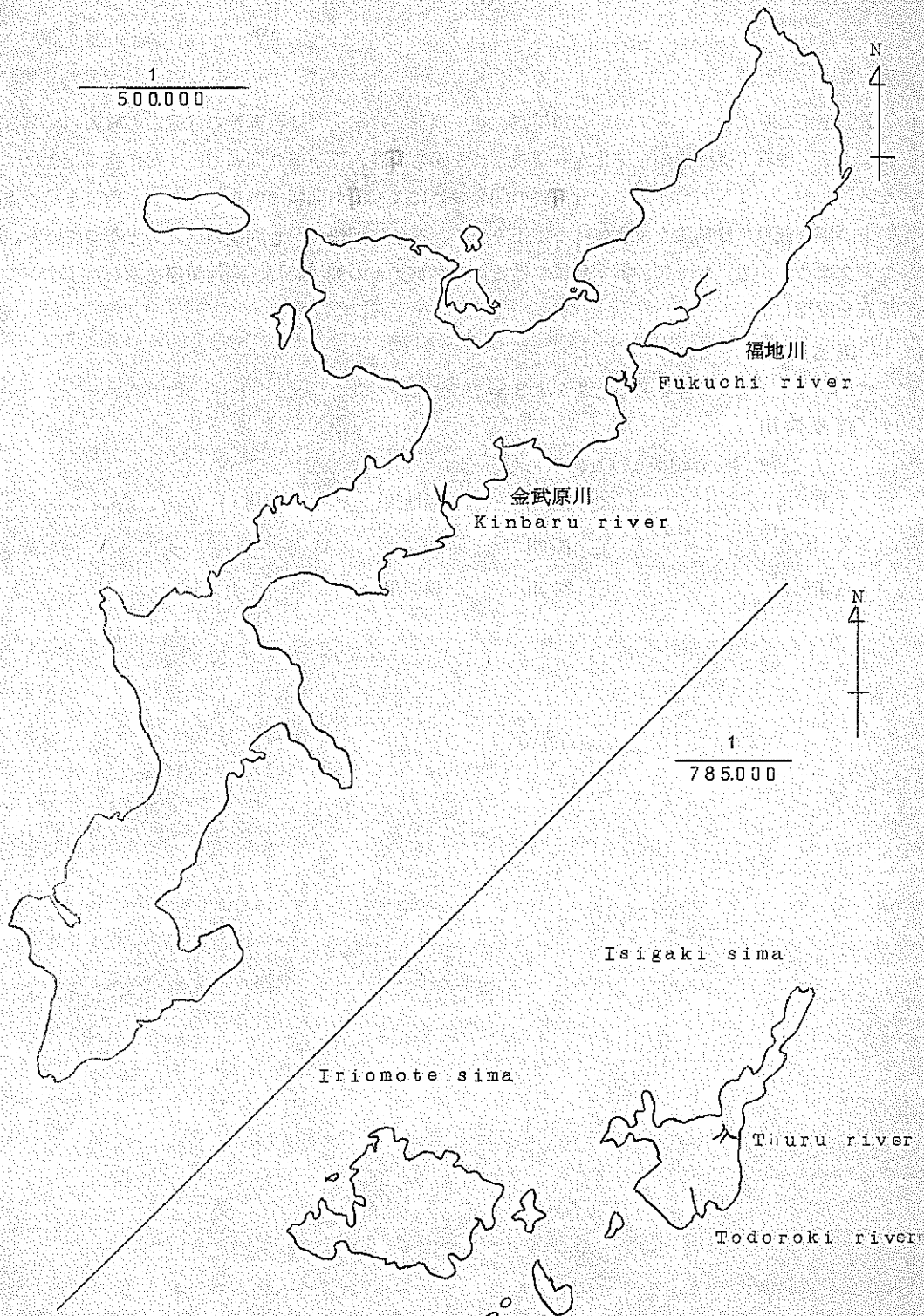
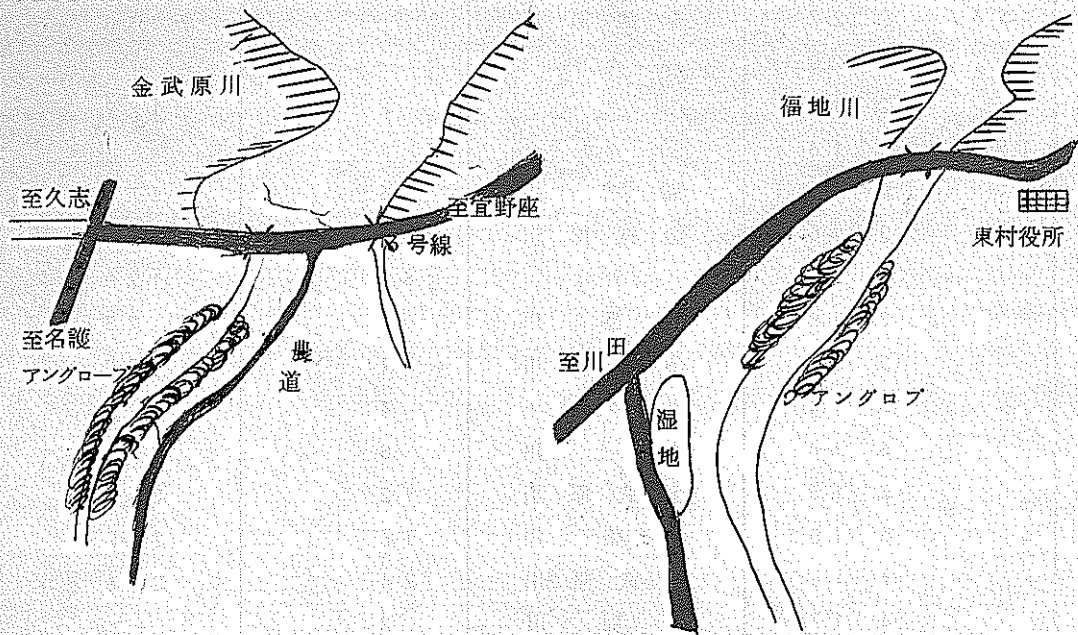


Figure 2 Observation Site



3 調査方法

河口に適当な観察場所を選びニッコーライト(1.5V×6)またはポータブル発電機(発電能力100V)で水面を照らし、30分おきに湖上するツラスウナギを数取器で計数すると同時にタモ網をもちいて標本を採集した。採集した標本はホルマリンで固定後測定をおこなった。尚観察場所の河口はいずれも5m~15m幅であった。

結 果

A 溯河時期

Table 1に示すように1967年、1968年をつらじての溯河時期は、12月18日に最初の溯河ウナギが観察され、翌年4月17日まで観察されたほか、幸地氏(北山高校教諭)より11月下旬に観察した報告をうけている。(未発表)しかしながら1967年11月20日の調査では溯河は認められなかった。

B 溯河量

ニッコーライト及び発電機を使用しての観察方法であったので、実際に観察計数出来たのは、照明範囲にも影響されるので、おそらく実数の7~8割程度であろう。

1日の最高溯河量を示したのは1968年2月28日の60尾で、最低値は同年の1月16日の1尾であった。その他の調査日の溯河量は30尾を越す事はなかった。(Table 1)

Table 1 number of upstreamed glass-eel in 1967 and 1968

調査年月日		河川名	観察尾数	水温
1967	9. 27	金武原川	—	23.0 °C
	11. 20	〃	—	—
	12. 18	〃	2	17.9
1968	1. 16	〃	1	—
	2. 14	福地川	6	17.8
	2. 15	金武原川	32	15.1
	2. 28	〃	65	17.0
	2. 28	白瀬川	7	17.8
	2. 29	金武原川	31	17.0
	3. 14	〃	4	—
	3. 14	轟川	8	22.0
	3. 15	金武原川	12	20.0
	3. 15	通路川	16	20.7
	4. 16	金武原川	24	21.6
	4. 17	漢那川	2	—

○ 大きさ

シラスウナギの大きさはホルマリンで固定後、全長を測定した。(Table 2)

標本尾数45尾中最大型が62.0mmであつた。58.0~59.0mmの大きさが全体の36%をしめしている。

Table 2 Size Frequency of glass-eels by River.

Total length mm	Kinbaru river	Sirasa river	Kinbaru river	Todoroki river	Thuru river
	Feb. 15	Feb. 28	Feb. 28	Mar. 14	Mar. 15
52 - 53	—	—	—	—	—
53 - 54	—	—	—	1	—
54 - 55	—	—	—	—	—
55 - 56	1	—	2	—	1
56 - 57	—	—	3	—	2
57 - 58	2	2	2	—	2
58 - 59	2	3	5	1	5
59 - 60	—	—	3	—	—
60 - 61	—	—	1	1	3
61 - 62	1	1	1	—	—
62 - 63	—	—	—	—	—
Range (mm)	55.8— 61.0	57.0 61.0	55.2— 62.0	53.0— 60.2	55.0— 60.1